

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 金 志善

本論文は、保護国期をも含めた日本植民地期（1905～45）の朝鮮において、日本人音楽家がいかなる音楽活動を展開し、それが近代朝鮮の西洋音楽受容といかにかわっていたかという問題を考察したものである。近代朝鮮の西洋音楽受容過程については、これまで、教会音楽である賛美歌、軍楽隊をはじめとする初期の西洋音楽関係組織、学校教育としての音楽教育、植民地期に朝鮮に設立された梨花女子専門学校音楽科や日本の音楽学校で学んだ朝鮮人音楽家の活動などの面から主に論じられてきた。しかし、それらとともに重要な要素の一つであるはずの、日本人音楽家の朝鮮での音楽活動については等閑に付されたままであった。本論文は、そうした研究史上の空白を埋めるべく、日本人音楽家の音楽活動を、音楽教育、音楽会、戦時総力戦体制下での彼らの役割、という三つの側面から明らかにしようとした。

まず第1章では、近代朝鮮の西洋音楽受容過程を先行研究に依拠して整理したうえで日本人音楽家の活動に注目することの研究史上の意義を確認し、次の第2章では、植民地期の朝鮮で活動した日本人音楽家の大半が東京音楽学校出身者であり、しかも主に中等音楽教員として活動したことを明らかにした。第3章と第4章では、この点を踏まえて朝鮮総督府の音楽教育政策や当時使用された音楽教科書、あるいは初等教育段階での音楽教育の実態などと彼らとの関係について論じ、第5章では、初等教育に大きな影響を及ぼした師範学校の日本人音楽教員の履歴・待遇および彼らによる音楽関係著述の内容を分析した。次いで第6章では、朝鮮を訪問した日本人音楽家によるクラシック音楽会の実態と、それらに対する朝鮮人の反応を考察し、最後の第7章では、1930年代後半以降、総力戦体制の展開とともに朝鮮総督府が進めた音楽関連団体の一元化と各音楽団体の諸活動を明らかにし、そこで中心的な役割を果たした人物として大場勇之助と平間文寿を取り上げてその活動内容を検討した。

このように本論文では、植民地期朝鮮での日本人音楽家の活動がその全時期を通じて見渡されている。これは、朝鮮音楽史研究における初の成果であると同時に、「外地」としての朝鮮を対象としたという意味で日本音楽史研究を補強するものでもある。しかも本論文は、必ずしも豊富とはいえない資料状況にもかかわらず、中等音楽教員として活動した個々の日本人音楽家の履歴やその具体的な活動内容など、これまでほとんど知られていなかった新事実を少なからず掘り起こすことにも成功した。以上のことは、研究史上における本論文の大きな功績として特記されるべきものである。歴史学の領域で近年活発化してきた植民地期「在朝日本人」史研究の成果が十分には押さえられておらず、資料分析の面でもさらなる深化の余地を残しているなど、問題点もいくつか指摘でき、また日本人音楽家の音楽活動を朝鮮の西洋音楽受容過程にいかに関与する点という点も今後の課題として残されているが、新しい研究の方向性を示した先駆的成果として、本論文は十分に評価に値するものと判断される。よって本委員会では、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしい業績として認定した。